

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 24 回 マエストロ・小澤征爾

もう 30 年以上前、小生、紅顔の美少年（？）たる大学生だった頃の話である。古典音楽（クラシック）が好きで、趣味が高じ、大学オーケストラ、更に、よせばいいのにアマチュアの合唱団に在籍していた。今回は、恥を忍んで、その頃の話である。

今や世界に冠たる指揮者・小澤征爾さん。ウィーン国立歌劇場の音楽監督に就任し、指揮者としてその頂点を極めた感が強い。まさにマエストロ（巨匠）と呼ぶに相応（ふさわ）しい存在となった。

その小澤さんと、東京上野の文化会館で、新日本フィルハーモニー交響楽団と競演する機会をもつことができた。曲は J.ハイドンのオラトリオ「四季」(ヤーレス・ツァイテン) という、演奏時間 1 時間以上、出演者総勢 200 名を越す大曲である。

こっちは素人集団、憧れの小澤さんとの公演とあって、連日の猛特訓、ステージではパート譜（譜面）を持つ事にはなっていたが、当然、歌詞も音符も暗譜（暗記していること）である。ところが小生、生来の怠け者、世界の小澤を向うに回し練習をサボって、歌詞を完全に覚え切らない内に「本番」当日を迎える破目に...、今考えると恐ろしいことである。

本番中、小生以外のすべての人は、小澤さんを正視し、全身全霊をかけ小澤征爾から眼を離さないかの如く必死で歌っていた。が、小生案の定、歌詞が分からず、譜面に見入ったきり。たまに顔を上げると、小澤さんのきつい目に睨まれ、背中汗が滝のように流れ落ちていった。おかげでアウフタクト（上拍演奏）を一人間違え、しかもそれが FM の全国放送で流れ、おまけにレコードまでライブ製作されてしまった。なんとも恥ずかしく、申し訳なく、終演後はお詫び行脚（あんぎゃ）皆に謝って歩いた。その時...

「小澤さんは、最初から最後まで私ばかり見ていた。しっかりしなかったから...」とある団員に言ったら、「とんでもない、小澤さんは私を見てた...」、「いや、小澤さんは私ばかりを見てたわよ...」。話しかけた殆んどすべての団員が、「小澤さんは自分だけを見ていた」。物理的にそんな事できる筈がない。180 度、ステージいっぱいスタンディングした合唱団、1 時間以上の演奏の中で、自分だけ見られていたなんて、あり得ない話である。

これは全くマジシャンである。小澤征爾という強力な魔力に引き込まれ、体と魂と、すべてを吸い込まれて、その虜（とりこ）になってしまった。震えるほどの緊張感が、今まで発揮したことのないパワーを産み、物理的にあり得ない幻想の世界を創出する。これはえらい事だ！自分の犯した罪さえ忘れ、ただ一人興奮の渦に漂（ただよ）っていた。

小生、経営者の端（はし）くれとして、こんなパワーに肖（あやか）りたい...と言いつつも、この日犯した罪の懺悔（ざんげ）を繰り返す毎日である。